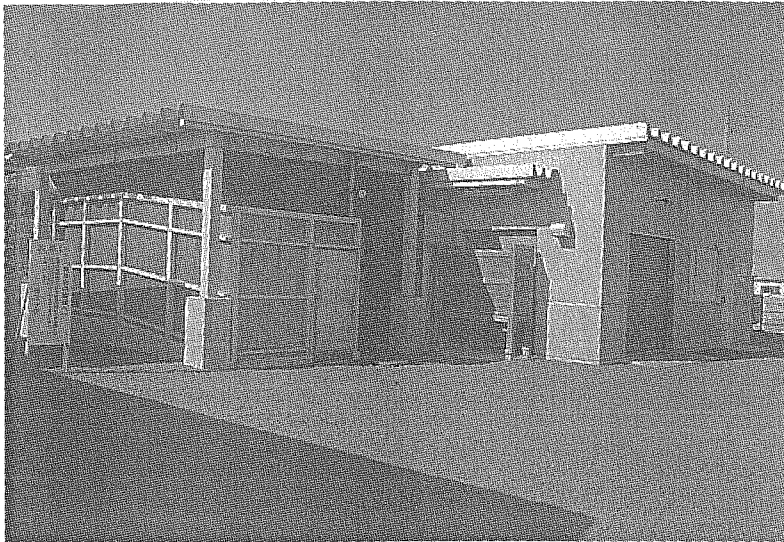


鹿肉処理加工販売のユック

大規模養鹿場を整備

産官学金連携で地域資源活用

鹿肉処理加工販売のユック(西尾祐司社長)は、国の「地域の元気創造プラン」に基づき交付金を活用し養鹿場の規模を拡大し、新鮮で良質なエゾシカ肉の製造を目指す。「北海道短期養鹿」と呼ばれる道内最大規模のエゾシカ肉生産システムで、西尾社長は「産官学金連携で、地域資源の有効活用と雇用の増加を図り、地域経済に貢献したい」と話している。



同社は平成十七年に創業。農産物被書の拡大で頭を抱える根室農協(現道東あさひ農協)と連携しながら、狩猟期間や害獣駆除でハンターが持ち込むエゾシカの処理とエゾシカ肉の販売を行ってきた。また、道との連携で「囲い良」による生体捕獲を行い、平成十八年一月には約十五ヘクタールの広大な養鹿場を開設。生体確保したエゾシカを短期養鹿し、猟期外の春から秋にかけて良質なエゾシカ肉の安定供給を図り、首都圏の高級レストランな

どに販売している。地域資源を活用した雇を生み出す先進的で持続可能な事業として、国の「地域の元気創造プラン」に基づく総務省の「地域経済循環創造事業」に補助申請していたもので、「北海道型大規模養鹿システム確立事業」として四千万円が十四日に交付決定。根室市では「地域経済循環創造事業補助金交付要綱」を制定し、五月一日開会予定の市議会臨時議会で予算案を提案する方向で準備を進めている。

ユックでは補助金のほか、北洋銀行根室支店から千万円の融資を受け、自己資金と合わせて現行の養鹿場を倍の規模の約三十ヘクタールに拡大し、飼養頭数を現行の百頭から二百頭に増産する計画で、規模拡大に合わせ従業員も新たに二人雇用し、総勢六人規模の事業所とする。

良質な牧草や森林を食い荒らし、市内のエゾシカ農業被書額はJA道東あさひの調べで、二十一年、二十二年度は八千万円台で推移していたものの、二十三年度以降は一億円を突破し、二十六年度は一億六千六十万円に上がっている。「個人の力には限界もある」と西尾社長。今回、道や根室市、道東あさひ農協、北洋銀行根室支店をはじめ、飼養するエゾシカの健康管理など東京農大の力も借りて完全養殖ではない「北海道型短期養鹿」を目指すもので、「地域資源の有効活用と雇用の増加を図り、地域経済に貢献したい」と話している。

道のまともになると、林業も含めた農業被書は年々増加の一途をたどり二十三年度には六十四億九百万円にも達し、エゾシカ対策を全道規模で展開。また、根室市もハンターの養成に向け補助制度を創設し、銃猟免許や鉄砲刀剣類所持許可の取得や猟銃購置など上限二十万円を補助するなど側面から支援している。近年、フランス語で「ジビエ」と称し、シカをはじめイノシシやカモなど野生鳥獣の肉料理が注目されており、一大産業化でエゾシカの個体数抑制や未利用資源の活用、雇用増大による地域経済への波及に期待される。(西田)